

接概念学習の学習曲線の因子分析を、概念学習の方略との関連で、試みた。多少 positive な結果も得られているので、データの補足を行ない、明年の紀要に発表す

る計画である。なお、“計量分析談話会”等を通じて、当地において、この領域に関心を持つ人々と親しくなれたことは幸いであった。

## 一 年 の 歩 み 薩 山 英 順

この一年は昨年度と同様に、臨床心理相談室における心理治療の実践を中心に、またそうした実践活動を通しての研究活動を継続してきた。

こうした活動の内容としては、自閉児の心理治療、治療教育を中心に、相談室においては自閉児の個別遊戯療法および集団遊戯療法を実践し、自閉児の治療教育においては学校教育の現場に出かけ、自閉児を持つ担任と具体的治療教育の方法について検討を重ねてきた。

これらの活動の「まとめ」として、本年度の紀要に丸井文男らとの協同研究として「自閉児の集団適応に関する研究—その(2)—、—その(3)—」をまとめた。前者においては、自閉児の普通学級における低学年段階の適応状況の変容とそれを規定する要因について検討し、後者においては、特に所属する学級の特質は問題にせず、症児側の知的ポテンシャルと高学年段階における学校適応上の問題について検討した。

また、自閉児の基本的な発達過程の把握の問題について、就学前までの過程の検討を行い、自閉児の言語発達過程による5類型のうち、最も発達速度の遅く、予後に関して悲観的と考えられている言語の消失期を持つ群

(L1型)の対人関係発達の様相から、L1型の中でも就学時までに良好な発達を示すタイプとやはり不良な発達しか示さないタイプのある事を見出し、日本教育心理学会第17回大会に発表した。

さらに、本年度においては大学院生、学部研究生の諸君と「遊戯治療における治療的意味の検討」を具体的症例を通して行ってきており、自閉児および情緒障害児の遊戯治療を中心に、そうした問題をまとめつつある。また、こうした方法によるスーパーバイズ・システムとしての有効性を感じており、今後、その意味においても検討していく予定である。

## 研 究 の 課 題 と 経 過 梶 田 正 巳

昨年4月1日付をもって、教育心理学教室へ着任した。この一か年は、新しい教室で研究を始めるための準備とこれまでの研究の成果に区切りをつけ、新たな出発点とする仕事に忙殺された。

1. 弁別学習の研究は、一昨年学位論文をもって、一つの折目をつけることができた。この論文には、未公刊の実験も含まれており、愛知教育大学中野靖彦氏と共に、日本教育心理学会第17回大会(昭和50年9月、宮城教育大学)において2編を口頭発表した。また、これに関連するその後の実験的研究については、本紀要の資料として執筆した。

2. 上記の研究との関わりで、新たな研究の方向付けを現在模索しようと試みている。これは、分類学習、弁別学習における「分類されたもの」、「弁別されたもの」の相互関連性について、Piagetのいわゆるgrowth of logic をヒントにして分析する仕事である。そのために、50年度の研究費で「反応時間自動記録装置」を設置して

いただいた。このおかげで、実験者は、被験者の反応記録をとることから解放され、学習過程を観察する余裕が生まれるようになった。なお、この装置を利用して分類学習の実験を始めているが、従来の学習過程の解析資料に、有意な成果をつけ加えることができればと期待している。この実験との関係で、3歳児より6歳児にかけて、線画による「具体物」を刺激として、命名反応の分布を調査した。この調査資料を手掛りとして、学習、記憶の研究ではきわめて必要度の高い「norm」の明らかな標準的刺激の作成を試みてみたい。この方向における研究には、若干の基本的問題を検討する必要がある、日時を要する。

3. 昨年11月春日井市立東部中学校において、第10回全国バズ学習研究集会在開催された。この集会上、塩田教授とともに助言者として参加したのであるが、改めて教育実践に直接示唆しうる教育心理学的研究の少ないことを痛感した。微力ながら、教育実践に役立つ教育心理

学的研究を志向して、一步を踏み出したいと決意した次第である。この方向における関心を、研究者と教師の集まりである「学習指導研究会」（昭和51年7月第1回例会）の活動を通して深めていきたい。

4. その他の活動としては、福村出版、大橋正夫・長田雅喜編、「心理学」（昭和51年4月刊）第4章第1節「学習とはなにか」、第2節「学習成立の型」を執筆した。また、黎明書房、大西誠一郎監訳、「児童心理学三つの理論」(Maier. Three theories of child development昭和

51年7月刊)の第3章「ピアジェの認知理論」を翻訳した。名古屋市青少年問題協議会より昭和50年度家庭教育問題調査専門委員の委嘱を受け、他の諸委員とともに「家庭教育資料——子どもの余暇利用の実態と家庭教育」名古屋市教育委員会(昭和51年5月)をまとめた。また、昭和49年度より特定研究科学教育「CAI算数・数学コースプログラムの開発と実験的実践化の研究」(代表者・国立教育研究所 主原正夫)に研究分担者として参加してきた。

## 2 年 目 の 経 過 小 嶋 秀 夫

2年目にして早くも繁忙となり、研究面でも教育面でも成果は不十分であった。今後は、仕事の方式を改めてより効果的な処理様式に切りかえる必要がある。

1. 親子関係に関しては、次のような点から、過去50年の研究の理論的・方法論的分析と評価を行うことを立案した：研究目的とその社会的背景、理論、概念と測定、結果と、それが学界と社会に及ぼした影響。この分析・評価の対象となる理論や問題：精神分析理論、Hall & Lindzey のいう社会心理的理論、学習理論、「経験と知的発達」の研究、認知的社会化の研究、比較行動学的研究。

2. いわゆる「認知様式」の領域での諸概念の測定に関しては、いくらかの知見が得られた。KaganのMFFの問題については、漸く1つの手掛りが得られ、日本心理学会第39回大会に一部を発表した。また、*Perceptual and Motor Skills*, 1976にも、精神測定上の問題として現われることになっている。WitkinのEFTに関しては、筆者が従来使用したものを改訂し、就学前幼児と低学年児童用のPEFTを作成した。15項目での内的整

合性は、5歳児で.89が確保できた。RFTに関しては昨年に開発した装置(ポテンショ・メータによる角度検出とディジヴォル・メータによる角度表示)に、ELによる刺激提示パネルをつけ、可搬性のある組立式暗室(1.8m×1.8m×3.5m)内で使用を始めた。MFF, WPPSI, PEFT, RFT, ラテラルティーなどからなるバッテリーを120名以上の幼児に施行した結果は後日発表される。なお、この研究に際しては、昨年に検討した児童研究の倫理問題のテスト・ケースとすることを考えた。

他のテーマに関しては、内外の研究者と若干の討論を行ったにとどまった。今年も学内の技官、学部の院生・学生諸君から、多くの協力をいただいたことを感謝したい。

なお、筆者は幸いにして、1976年8月から1年間、ハーバードを足場にして研究するチャンスが与えられることになった。この機会に、上述の1と2の研究を進めるとともに、広範囲のアイデアや研究結果に触れることを期待している。この経験を、研究面と教育面の両方に活かすことができればと思っている。

## 研究経過報告 —この8カ月の歩み— 田 畑 治

昭和50年8月1日より当教室のスタッフとして加わり、すでに半年以上経過している。着任後、10月24日に行なわれた就任講演は、「カウンセリングの実践と研究から学んできたこと」と題して、「いまここでの私」、これまででの私、そして「これからの私」をパーソナルあるいはプライベートな世界にまで言及しながら行なった。この講演で、名大着任の「イニシエーション」の意義を明らかにしえたと考えている。

さて臨床心理学は、きわめて主観的色彩の強い実践の世界での諸事象に目を開き、かつ客観的に記述し研究することを要請する。それは至難のわざであり、粘り強さが要求されると痛感している。研究者の倫理性や生き方も深くかかわってくるからである。

着任以来、ここに半年余りにわたって手がけてきている一連の研究を報告し、問題意識の一端を明らかにしたい。